

令和 5 年 2 月 22 日

教 育 長 様

研究コース	
グループ研究B	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
682513	
選定番号	237

代表者	校園名 :	大阪市立今市中学校
	校園長名 :	赤坂 寛臣
	電話 :	06-6952-0371
	事務職員名 :	糸谷 龍太
申請者	校園名 :	大阪市立今市中学校
	職名・名前 :	主務教諭 山川太一
	電話 :	06-6952-0371

## 令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究B	研究年数	継続研究（3年目）
2	研究テーマ		小中連携における体力向上の効果 ～校下小学校とのチームビルディングによる新体力テストの数値向上～		
3	研究目的		○小学校教員への研修会の実施と情報共有による教員の指導力向上 ○大阪市全体に向けた研究発表を行い、校下小学校だけでなく、本市教職員全体の指導力向上 ○小中連携による体力向上をベースとした、I C T 機器を使った授業や家庭学習の研究 ○新体力テストの数値向上に向けた、具体的な日々の実践トレーニングの研究 ○体力向上をベースとしながらも、主体的、対話的で深い学びを実践し、各種の運動の特性に応じた基本的技能を身に付けていく授業の研究 ○小中連携における具体的な成果と課題の研究		
4	取り組んだ研究内容		<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。 (MSゴシック 9.5pt イント)</p> <p>1、小中連携における体力向上を目指し、校下小学校教員の指導力向上を目的とした研修会を小学校で実施した。</p> <p>(1) 新体力テストの数値向上を目標とし、シャトルランの数値向上、長距離走の指導方法などの研修を実施した。</p> <p>(2) 実施内容は「「持久力の向上」と基本的な考え方と指導について」 長距離走（持久走）について、基本的な考え方や、指導方法などを中心に苦手、嫌い意識を、楽しく、前向きに取り組めるようにするにはどのような指導方法や声掛けがよいか、専門的な知識の伝達のもと、それをどのような形で小学生に教えるかということに重点をおいて行った。</p> <p>(3) 校下2小学校にて以下の日程で実施 1月16日 太子橋小 2月 7日 古市小（指導講評：大阪教育大学准教授） 両日とも多くの先生方に参加していただき好評を得た。</p> <p>2、課題の共有 体育理論として、専門的な知識を学ぶ場面が普段少ないことに加え、体力テスト項目における研修会や、水泳、球技や機械運動などのスポーツも研修の必要性を確認した。</p> <p>3、アンケート結果から、跳び箱、水泳、ウォーミングアップなどの実技研修も行ってほしいという要望も多くの先生方に実施した。</p> <p>4、新体力テストにおける、計測方法やアドバイスによる数値変化の研究を行った。</p> <p>5、体力向上をベースとしながらも、主体的、対話的で深い学びを実践し、各種の運動の特性に応じた基本的技能を身に付けていく授業の研究を行った。</p>		

		研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。						
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	日程	令和5年2月7日	参加者数	約30名			
		場所	古市小学校 多目的室					
		備考	「持久力の向上」と基本的な考え方と指導について					
6	成果・課題	大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および数々の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。						
		<p><b>【見込まれる成果1】</b>            研修会を行うことで本校所属教員をはじめ、小学校教員や他校教職員の授業力向上を図る。</p> <p>《検証方法》            参加者にアンケートを取り、「自身の授業力向上に役立った」の項目において肯定的な回答を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕            「自身の授業力向上に役に立ちましたか?」というアンケートに対して、とてもそう思うと回答した方が92.5%、そう思うと回答した方が7.5%であり、肯定的な回答が100%となつた。多くの先生方に参加していただきながらも、授業力向上に役立つ研修ができたことで、本校体育科教員のスキル向上にも役立つことができた。また、専門的な知識や、見解を述べたことで、今までの声掛けや指導を見直すきっかけとなつたと回答されている方が多く、参加していただいた先生方の授業力向上に貢献したと考える。</p>						
		<p><b>【見込まれる成果2】</b>            公開授業を行い、参加者の満足度を高め、本校の研究の成果を広く周知し、本市教育の充実に貢献する。</p> <p>《検証方法》            参加者アンケートを実施することにより、「本研修に参加して良かった」の項目において肯定的な回答を80%以上達成する。</p> <p>〔検証結果と考察〕            コロナウィルス感染症拡大に伴い、小学校と相談し、授業の実施はできなかつたが、「アンケートの「本研修に参加して良かった」の項目において、「とてもそう思う」と回答した人は、92.5%、「そう思う」と回答した人は7.5%となり、こちらも肯定的な回答が100%であった。シャトルランの計測方法の見直しだけでなく、持久力を高める運動として、楽しみながら行う授業の実施は、特に低学年の小学生にとって有効といえる。本研修は、校下小学校だけでなく、多くの小学校教員の方に周知したい内容である。</p>						
		<p><b>【見込まれる成果3】</b>            ICT機器の活用等、多様な指導法を工夫することにより、児童生徒の興味関心の向上を図ることで、主体的に学習に取り組む態度を育てる。</p> <p>《検証方法》            授業アンケートを実施し、「ICT機器を使うことで理解が深まった」という項目で肯定的な回答を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕            授業アンケートを実施し、「ICT機器を使うことで理解が深まった」という項目において、肯定的な回答が92%であった。ICT機器の活用においては、単元によってばらつきがあり、特にマット運動やダンスの授業において効果を感じている生徒が多かつた。逆に、バスケットボールやバレーボールなどの球技は、あまり必要だと感じている生徒が少なかつた。体育におけるICT機器の活用については、使うタイミングを精査する必要がある。</p>						

6	成果・課題	<p><b>【見込まれる成果4】</b> 体力向上と基本的技能を身に付けさせる。</p> <p>《検証方法》 授業アンケートを実施し、「体育の授業を通じて体力が向上した」「体育の授業を通じて基本的技能が身についた」という項目で肯定的な回答を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕 授業アンケートを実施し、「体育の授業を通じて体力が向上した」という項目において、肯定的な回答が92%であった。また、「体育の授業を通じて基本的技能が身についた」という項目において、肯定的な回答が99%であった。生徒全体が「体力の向上」を感じており、基本的な技能も身に付いてきていることが分かる。全体の授業を通してというよりも、授業前のウォーミングアップの効果が大きいと思われる。</p>
		<p><b>【見込まれる成果5】</b> 新体力テストの「シャトルラン」および持久走の「長距離走」において、指導やアドバイスによって数値を向上させる。</p> <p>《検証方法》 新体力テスト「シャトルラン」および陸上競技「長距離走」において、計測タイムを回数を重ねるごとにタイムを上げる。</p>
		<p>〔検証結果と考察〕 シャトルランを最初と最後の授業で行い、検証を行った。また、その間の授業は最もスピード持久力が向上する1500mを中心に行つたが、回数を行うごとに学年平均タイムが約9秒ずつ伸びていった。特に運動を普段行っていない生徒の伸び率が高く、また中間層の生徒のタイムの伸びも大きかった。しかし、最後のシャトルランの伸び率は横ばいで1500m以上の記録向上は見られなかった。求められる体力要素が少し違うか、1500m走の「走り方」「追い込み方」が分からず、1回目は様子を見て走っていたと考えられるが、持久走の授業は中学生の時期においてとても重要であり、効果が高いといえる。</p>
		<p><b>【研究全体を通した成果と課題】</b> 具体的に記載してください。 今回で本テーマの研究は3年が終了した。回数を重ねるごとに、小学校の先生方が非常に前向きで、意欲的に取り組んでくださることで、さらに充実したものとなった。今回も2つの小学校で研修会をさせていただいたが、本研修のようなものを「水泳」「跳び箱」「走幅跳」「ウォーミングアップの仕方」「鉄棒」「走高跳」などで行ってほしいという要望も多くいただき、来年度も継続して行っていきたいと強く感じることができた。 一方で、小学校の先生方が「専門的な教科指導の知識を学ぶ場」が非常に少ないと感じ、小学校の先生と中学校の先生が教科指導や生活指導の意見交換を行う場が少ないと感じたことは本市全体の課題でもあると感じる。また、もっと学びたいと思っておられる小学校の先生方が多い中、中学校教員の専門的知識を伝達する場が少ないと感じた。小中連携は文部科学省でも推進されており、ほとんどの学校で成果が出ている。今後、そうした成果を、小中連携、一貫教育に取り組む他の学校と情報共有し、大阪市全体レベルでも広げていく必要があると考える。</p>